

太陽が^{はっ}発するエネルギーは、太陽内部の物質のぶつかり合い・混じり合いから生まれています。

ひとつの^{みなもと}源があって、そこからエネルギーが放射されるのではなく、太陽内部の絶え間ない変化によってエネルギーが生じるのです。

そのエネルギーが、私たちが照らし、^{はくく}暖め、育むのです。

私たちのエネルギーも、同じように^{しょう}生じています。

私たちの体は、変化し続けています。

人間は一日に約三キログラムの物質を取り入れ、呼吸し、^{はいせつ}排泄しているそうです。取り入れる中で最大のものは水で、次いで酸素、それ以外は食べ物から取り入れます。^{はいしゅつ}排出も、汗や吐く息も含めて水が多くを占め、その次が二酸化炭素です。

地球上では、風が吹き、雨が降っています。私たちの呼吸は、^{じゅんかん}風の循環の一部であり、私たちの水分の吸収と排出は、水の循環の一部です。風がいのちを支える呼吸として、私たちの体を吹き抜けていくのに、数分間^{よう}を要し、雨が体をうるおす水分として、私たちの体を通り抜けていくのに、二日ほど要するそうですが、このように、私たちの体の中には、絶えずめまぐるしく、さまざまな物質が入ってきて、駆け巡り、そしてそこから出て行くのです。

この変化のプロセスから、エネルギーが作りだされるのです。私たちのいのちも、絶えず変化し続けながら、エネルギーをつくりだしているのです。

「変化」を仏教の言葉で表現すれば、「^{むじょう}無常」になります。^{つね}常で^な無いということですから。太陽も私たちも、「^{しょう}無常の力」によって、^{しょう}生じているといえるのです。

私たちひとりひとは、「無常の力」によって生じている、ひとつひとつの太陽にたとえることができるでしょう。

太陽ならば、まわりを照らし、暖め、育む生き方をせねばなりません。

私たちは、^{いつく}慈しみという光と、やさしさという熱を放つ太陽となって、自らを輝かせて、共に^{まわ}周りを照らし暖める存在となりたいものです。